

本研究の趣旨

～身近で見えにくい二ホンノウサギという存在～

二ホンノウサギは、本州・四国・九州および周辺島嶼に広く分布する日本の固有種です。森林や草原、里山の縁辺部など、人の暮らしと隣接する環境に生息していますが、夜行性で警戒心が強く、昼間は藪や草陰に身を潜めているため、その姿を実際に目にする機会は多くありません。

その生態は、ノウサギという名が示す通り、巣穴を持たず単独で行動し、発達した後ろ脚によって一気に駆け抜ける俊敏な逃避行動が特徴です。

こうした動きは、物事が一瞬で展開するさまを表す「脱兎の勢い」という言葉の由来ともなり、二ホンノウサギは古くから迅速さや機敏さの象徴として捉えられてきました。

また、二ホンノウサギは妊娠期間が短く、年に複数回出産する高い繁殖力（多産性）をもっています。

この生態的特性は、生命力や再生の象徴として人々の想像力を刺激し、併せて兎は月に棲む存在として語られてきました。

兎の意匠は着物や工芸の文様、歳時や縁起物にも繰り返し用いられています。

身近に生息しながらも容易に姿を現さないという特性を持ちながら、二ホンノウサギは日本人にとって、自然の生命力を象徴する動物として親しまれてきたといえるでしょう。

一方で、二ホンノウサギは完全な草食性であり、草本類だけでなく樹木の芽や樹皮も採食します。

そのため、再造林地においてはスギやヒノキなどの苗木をかじることで、造林木に被害を与える存在ともなっています。

特に植栽初期の幼齢木では、主軸を切断されることにより、成長阻害や枯死に至る場合もあり、その被害対策は森林整備・森林経営を進める上で重要な課題の一つです。

本研究アーカイブでは、二ホンノウサギを単に「害獣」として位置付けるのではなく、その生態的特徴や行動特性を正しく理解した上で、被害を抑制する手法について、これまでに蓄積されてきた研究成果や実践事例を整理・公開しています。

森林生態系の重要な存在である二ホンノウサギの生態を知り、適切な防護を行うことは、人と野生動物が共生を目指すための基盤となると考えています。

